雪づきの朝

伊藤　まき

平成十六年一月

伊藤まきは会社の通用門を出て思わず身をすくめた。

「さむー」

足元からさあっと冷気が押し寄せて全身に伝わった。アスファルトの道路をうっすらと雪がおおっていた。きのう、退社時になってまきのチームのシステムの異常に気が付いて点検をした。結果は単なる入力ミスにかかわらず、いつのまにか徹夜の作業で朝になろうとしていた。男性社員たちはそのまま仮眠をして会社の始業時間を迎えてから他の社員に引き継いで帰宅する事になった。チームリーダーであったが、システムも順調になったので、まきは自宅のマンションが会社の近くということもあり、後を男性社員に任せて、明けやらぬ冬の朝に飛び出した。仕事に夢中で雪が降ったのにも気が付かなかった。それは、ここ香川の高松では雪を見ること自体少ないせいでもあった。会社の開発部のまきのチームは現在六人で四人がまきより年下の男性でその外にパートの女性社員が一人いるが、彼女は、昨日の退社時間にすでに帰宅していた。情報通信関連の会社に入ってまもなく十四年になろうとしていたが、徹夜の経験は初めてだった。積雪の道路に人影はない。まきは凍えそうな寒さに負けまいと歩き始めた。帰宅への途中、ホテルに隣接の喫茶店が開店しているのに気が付いて、ゆっくりと中を確認しながらドアを押した。この喫茶店はホテルの食事のためのフロアとは別にある。そのため、人影もまばらで落ち着けるので、何度か立ち寄ったことがあった。暖かさにほっとした。

「ちょうどあの朝もこれぐらい寒かった。」

まきは短大時代を思い出した。今までどこかに隠れていた風景が遠いところから静かにゆっくりと現れるように体中に湧き上がってきた。

平成二年一月

中村貴志は始発の電車に乗るために雪の道を北へ向かった。まきは彼の黒いコートが点になるまで大学の寮の前で見送った。半纏の下で体が凍えそうだった。

前年の四月、昭和から平成になった年だった。

まきは香川の高松市の地元の高校から神戸のM女子大の短期大学部に入学した。小学校から大学まである女子の一貫校だった。三つ下の弟が県外の私立の大学へ行きたいとのことで県外の大学を希望するなら短大、そして寮に住むと言うのがまきの進学の条件だった。男尊女卑の両親の言い分に素直に従うつもりにはなれなかったが、結局その通りになった。

同じ高校から五人受験し、三人合格したがまきと岡田友子の二人が入学した。彼女とまきは入試の時からいつも一緒だった。個室の寮を希望して抽選に外れ、第二希望の相部屋の寮になった。先輩と後輩の二人住まいというのが難点であったが、大学にも電車の駅にも歩いて十五分という近さにまきも友子も喜んだ。

入学式当日は大学内の桜が満開だったが、雨が降っていた。花冷えだった。入学式を終えた午後、二人は、大学の校舎内を見学していた。合同サークルの勧誘によその大学から男子学生も来ていた。まきと同室の先輩、大西由香里が大きく手を振った。

「伊藤さーん」

「あっ、由香里先輩だ」

二人はそばに駆け寄った。

「私、S大の合同サークルに入っているの。貴女達も入らないかなと思って…」

二人の男性が由香里の傍にいた。背が高く精悍な顔つきの男性が言った。

「S大の青木です。卓球部の仲間を探してるんです。」

まきは友子と顔を見合した。二人とも高校時代に卓球などしたことがなかったが、国立S大とのサークルには興味があった。二人の様子にもう一人の男性が声をかけた。

「S大の近くの卓球場に集まってみんなでわいわい練習する程度だから、経験なんてなくても良いし…ラケットだけあればできるし、もし分からなければ、ラケットを買う時にはついて行くよ。」

それが中村貴志との初めての出会いだった。青木と対照的で、優しい感じがした。

その説明には説得力があった。
「じゃあお願いします」
まきと友子は声を揃えた。その時、まきは桜の花びらが冷たい雨に混じって落ちる中庭の様子を貴志の肩越しに眺めていた。これからの学生生活への期待と不安が交錯するまきと友子に向かって貴志は優しい笑顔で答えた。
「一緒に楽しくやろうよ」
それからまもなくして、卓球の合同サークルの総会がＳ大のキャンパスで開かれた。電車を乗り継いでの郊外の大学は思ったより遠かった。自己紹介などが終わり昼食を済ませて、再び友子と電車で乗り継ぐ駅に帰った。友子はそこで高校時代から付き合っているボーイフレンドと待ち合わせをしていた。それで、まきは一人寮へ帰る電車に乗った。休日の午後、電車は空いていた。ぼんやりと外を眺めながらふと気が付くと、中村貴志が笑っていた。彼はまきの横に座ると声を掛けた。
「ひとり？岡田さん一緒じゃないの」
「友子は友達に会うので、別れたの」
「僕、アルバイトの家庭教師の生徒宅へ行くところ」
その生徒の家はまきの寮の近くだった。二人は同じ電車の駅で降りた。貴志は帰りにその駅の近くの喫茶店で会おうとまきを誘った。寮で夕食を済ませたまきはそこに急いだ。日が暮れて頬にあたる北風が少し冷たかった。地元から出てきてまもなく二ヶ月、Ｓ大生とおしゃべりできることに胸弾ませて歩きながら、まきはちょうど今頃のこんな季節に吉岡卓也と地元の喫茶店で語り合った事を思い出した。高校に入学してまもなく、同級生から柔道部の先輩の吉岡卓也が付き合って欲しいと言っていると告げられた。柔道で高校総体に出場して優勝したい、そして柔道で名門と言われている東京の大学に入学して、夢はオリンピック、とつとつとしゃべる彼の顔は輝いていた。が、その時以後、彼は連絡をくれなくなった。高校総体に優勝するどころか彼は代表にも選ばれなかったと後で知った。まきはがっかりしたけれど彼がそれきりどうして連絡をくれないのかと胸を痛めた。彼の夢に向かう情熱は確かに素晴らしかった。でもまきはこわもての彼の内面にある秘めた思いやりのあるやさしさに惹かれていた。それが彼の魅力だったのに、彼は会ってもくれなかった。彼の誕生日が夏休みの前の七月十九日だったので、プレゼントにと彼にＴシャツを買った。その日、部活もやめて帰宅する彼を校門で待った。まきに気が付くと

彼は足を止めた。
「柔道やめたみたいね」
「いやになった。勝てなきゃ」
「一度総体に出られなかっただけで諦めるの」
「そういうことじゃなくて、むいてないと言う事が分かった」
「そう…でも柔道だけがすべてじゃないし、わたし吉岡さんにこれからも会いたいと思うし」
まきの言葉を途中でさえぎって、彼はきっぱり言った。
「君に僕から申し込んだのに悪いと思っている。でももう付き合う気持がなくなった。ごめん」
「誕生日のプレゼントがお別れのプレゼントになったけどとても気にいって買ったの。受け取って欲しい」
無理やりTシャツを押し付けてまきは走った。走りながら、自分の気持がどうして伝わらないのか、彼はその気持ちをなぜ聞こうとしなかったのか、彼のやさしさはどこに隠れてしまったのか、とめどもなく押寄せる色々な思いが涙になってどっとあふれた。それから一年以上経った卓也の卒業式の日、式の終了後、ひとり校門近くにいた卓也に気が付いた。まきは、一緒にいた友達に後で合流する事を告げて、卓也に声を掛けた。
「第二ボタン頂戴」
まきはぶっきらぼうに手を伸ばした。驚きの表情のまま、卓也は学生服まで破れそうな勢いでボタンを引きちぎった。学生服の下にまきのプレゼントしたTシャツが見えた。ボタンをまきの手に載せて、両手でその手をギュッと握った。
「ありがとう…ほんとに好きだった」
「それならなぜあの時にあんな事を言ったのよ。」
手にぼろぼろと卓也の涙が落ちた。卓也の手の指の間からまきの右手にそれは流れた。何も言えなくなった。それっきりだった。
喫茶店の入り口に中村貴志の顔が見えた。穏やかな小さい顔だった。卓也と比べてまきは思わず笑った。まきの前に腰掛けて彼は親しい表情を見せた。
「伊藤ってまきって名前だよね。」

「いーとまきまきって歌があるので、いとうまきっておかしいでしょう。」
今までに何回この話しをしただろうか。そしてこれから何度となくするだろうと思いながら、S大生の貴志に話す機会が訪れた事に喜びを感じていた。

まきの父は高松に本店がある銀行に勤めていた。まきが生まれる前、松山勤務になり、母は松山の社宅に住んでいた。まきを妊娠していた晩秋の頃、運動不足を補うため近くの女子高まで散歩をしていた。そして、フェンス越しにテニス部の練習を毎日見ていた。十数人の女生徒の中の一人を母はいつもかわいいと思っていた。
「丸顔でね、色白でいつもにこにこしていて、とてもやさしそうなの。遠くでランニングをしていても彼女は直ぐ分かるの。ちょっと他の女学生とは違うの」
ある日、テニスボールがフェンスを越えて母のそばに転げてきた。その彼女がボールを追って母のところにやってきた。
「すみません、あたりませんでしたか。」
うなずく母に微笑んで、ボールを握っていた母からありがとうとボールを受け取った。その時部活の仲間が
「まき、早く」と声を掛けた。彼女は再び母に笑顔を見せると会釈をして校庭に駆けていった。その時母はおなかをさわりながら、この子の名前は「まき」だと思った。その日を境に急に寒くなり風邪気味になって、それきり彼女に会うこともなくやがて三月にまきが生まれた。
「ほんとにお母さんの願いがまきって名前に込められているのよ。あの時のまきちゃんよりもまきはかわいいよ。おかあさんまきが大好き。」
小学生の時、「いーとまきまき」とからかわれて、泣きながら母に訴えると、母はまきを抱きしめて説明をしてくれた。
「素晴らしいお母さんだね。すてきな、いい名前なんだ。」
この説明をして母を誉める人はなかった。
まきはあの時の母が今でも一番好きだ。その母を素晴らしいと言うS大生が今ここにいる。体中にふつふつと幸せがプラスされていくような気持になる。
　中村貴志の父は福岡の出身で地元の国立大を卒業して大阪にある大手の薬品会社に就職した。その社内で貴志の母と出会い結婚をした。
貴志には五歳違いの姉がいるがすでに結婚して福岡にいる。

「転勤なの。こちらで福岡の人と知り合ったの」
「親戚の勧める見合い結婚で福岡の人と。姉がどうしてあんなにすんなりと結婚したのかなと時々思うことがある。姉は父さん子で父の死んだ後、何かと母と意見があわず、けんかする事が多かったので…家から離れたかったのかなあ」
　貴志の姉が結婚したのは彼の父が急逝した後の事だ。
「相手の方をきっと好きになったのよ」
そう言ったもののまきに確信があるわけではなかった。
貴志が高校二年の夏、母の異常な叫び声に飛び起きて、隣の父母の部屋に姉と同時に駆け込むと父が死んでいた。その横で母が崩れるように座っていた。その事を話す貴志の表情は暗かった。まだ三年前のできごとだ。いつもの朝、台所で父を待っていた母が父の起きてくるのが遅いので様子を見にいくと眠るように父は死んでいた。母が起きる時にすでに死んでいたのかどうかは分からない。説明しながら貴志の声は沈んでいた。悲しみのかけらはまだ彼の体内にいっぱい残っている。まきの目にも涙がにじんだ。その後、彼の母は父の知人の貸室を借りて小学生の算数教室を開いて、車で通っている。それで車でのドライブはいつもできないけど時々は会って欲しい。喫茶店を出て暗い夜道を寮まで送ってもらう途中で彼はそう言った。まきはうなずいた。寮の前で手を振って別れた。
その年の六月、梅雨入りしてから、毎日のように鉛色の空から雨が降ったり止んだりした。ジメジメして、梅雨らしい天気が続いていた。寮の廊下やフローリングの床を素足で歩くと足の裏がじとっと感じた。
そんな休日の朝、洗ったばかりの髪が顔にまとわりつくのを感じて、まきは美容院で髪をカットしようと外出の準備をしていた。
隣の部屋の岡田友子が、
「まき、電話よ」
と、ドア越しに顔を出した。彼女のかわいい顔をまきは好きだった。いつもほっとする。
「中村さんからだよ」
寮の玄関に二台の公衆電話がある。先程友子が電話中だったので、電話を受けたのだろう。いつもは管理人室で取って、各部屋に連絡がある。
「急に母が研修で東京に出かけて車が空いたから今から迎えに行くよ」

結局、美容院へ行きたい事を言い出せないまま貴志の誘いに乗った。練習という事で貴志を助手席に、運転席でハンドルを握りながらまきの口数は、少なかった。フロントグラスの向こうに厚い雲が垂れ込めてそこから一粒、二粒雨が落ちてきた。まきの通い慣れた大学を通り過ぎて、広い交差点に出た。

「止まった方がいいよ」貴志の言葉に一瞬ブレーキに足を置きながら、青が点滅している交差点をアクセルを踏み込み通り過ぎた。その瞬間パトカーがサイレンをならして車の前に止まった。前のパトカーから警官が降りてくるのが見えると、貴志も車を降りた。

「すみません。僕が行けと言ったから…彼女実家の四国の方で免許をとって、始めてこちらで運転したものだから不慣れで」

「いや、止まりかけたのに急に前進したので、何かあるのかなと思って…免許証見せて」

結局まきの免許証が実家のある香川のものであることだけを確かめて、警官もパトカーも去っていった。止まった方がいいよとの貴志の言葉がパトカーが後ろにいたせいであったことに、まきは気付かなかった。その事に対しての自分への歯がゆさが体中をおおった。

「ごめんなさい」やっとの事で声になった。車を走らせながらこれからどこに向かったら良いのか、何をするべきか、頭が真っ白になった。

「どこか近くの喫茶店で休もう、左側のどこかで」

貴志の声にうなずきながらまもなく古い建物の喫茶店の駐車場に止まった。軽くそっと背中に手を置いて貴志が促した。店内にショパンの「雨だれ」が流れていた。奥の席に座るとほっとした。窓の外は本降りの雨になっていた。雨だれの曲に雨音が重なった。貴志が注文した珈琲が置かれ店の人がいなくなると、涙がつぅと頬を伝わった。

「誘った時から伊藤が気乗りしてないのはよく分かっていたよ。でも僕は会いたかった…どうしても顔が見たかった。この頃いつもまきいや伊藤のことを考えているんだ」

まきでいいよと言おうと思ってもそれは言葉にならなかった。涙がひっきりなしに流れた。

「好きになった…」

貴志の気持がまきの胸にズドンと入ってきた。
最初のデートから由香里、友子などと青木もまじえてドライブを何度かしている。由香里の彼の青木のそばで貴志はいつも穏やかな表情だった。その彼が顔を上気させていた。店内の曲がやはりショパンの「革命のエチュード」に変わっている事に気が付いた。たたきつけるような旋律が流れた。それが、ピアノを習っている時、左手の練習曲であったことを思い出した。まだ小さい左手で必死に鍵盤をたたいた様子がなぜか鮮明に思い出された。まっすぐ貴志を見つめた。その目にはもう涙はなかった。国立S大二回生中村貴志の澄んだ目が彼女をほのかに幸せにしてくれた。たとえようのないぬくもりの心地よさに今朝からの憂鬱が遠のいた。
「ありがとう。」
「うれしい…」まきは笑顔だった。

その翌年の平成二年一月

冬休みが終わり、まきが香川の自宅から寮に帰ってまもなくだった。夜、寮の近くの私鉄の駅に面したハンバーガーショップで貴志はまきを待っていた。まきはワープロ教室の帰りにそこへ駆けつけた。ドアに手をかけて店の中に目を向けた。黒いコートを着たまま貴志は本を読んでいた。入り口には目もやらずゆったりと下を向いたままだ。約束の時間はとっくに過ぎている。
「ごめんなさい。遅くなって」
やっとまきに気が付いた様子でにっこりと目を移した。そんな時の貴志がたまらなく好きだった。彼はいつも焦らない。時間に少し遅れようと来る事が分かっている時は待っている様子が感じられない。ワープロのブラインドタッチに戸惑っていることをしゃべり始めると貴志はコートを脱いだ。
「さっきから暑いなと思いながら気が付かなかった」
まきは思わず笑いこけた。その夜は寮の同室の一年先輩の由香里が不在だった。外泊許可が出ていた。おそらく青木と一緒だろう。管理の方はそんなに厳しくなかった。夜の外出もその理由を管理人の方に伝えておけばよかった。管理人が持ち主のアパートをまきの通う女子大が寮として借りている。貴志が電車に間に合わなくてもまきの部屋で泊まれば良い。こんな機会は初めてだ。由香里がいないのでそのス

ペースに布団を敷けば大丈夫だ。寮の裏口を開けてもらうように、岡田友子に頼んであった。思う存分しゃべった。ずっと貴志と一緒にいたかった。ハンバーガーショップの客も減って周りが静かになった頃、二人は外に出た。

「さすがに寒いな」

貴志の声に相槌を入れながら横から抱きついた。彼はコートを広げながらまきの肩に手を回した。風に背を向けて寮までの道のりは、あっという間だった。門から右側に管理人の家族の住まいがある。足音を忍ばせながら、左に進んだ。入り口から四番目にある友子の部屋の窓ガラスを叩くやいなや裏口から彼女が顔を出した。

「由香里先輩が急に帰ってきた。電話も使えないし、ポケベルを鳴らしても連絡できないし…どうしょうかと思っていた。先輩は不機嫌そうにしていたので声も掛けてない」

友子の困惑した声と表情が状況の大変さを物語っていた。

「ごめんね。心配させたよね。寒いから部屋に戻って。何とかなると思うわ」

貴志を振り返りながら、友子を部屋に帰した。裏口から入るとすぐにまきの部屋だ。そっとまきの部屋に二人で入った。部屋に備え付けのベッドは小さいので空いたスペースに布団を敷いて寝ようと思っていた。そのスペースの中央に間仕切りのカーテンがされている。カーテンの向こうにいるはずの由香里の様子は全くわからない。電気は点いていない。

「狭いけどごめんね。二人でベッドに…」小声に貴志は小さくうなずいた。まきは、パジャマに着替えてベッドの壁際に横になった。コートだけを脱いだままの貴志がそっとベッドに入ってきた。頭の先端に貴志の唇を感じた。背中からまきを抱いた。青木と由香里にいったい何が起こったのだろう。けんかでもしたのだろうか。

「あの二人この頃うまくいってないようだけど大丈夫かな」貴志が一度言った事があった。青木が貴志に何か言ったのだろうか。その事を確かめたくても由香里がカーテンの向こうに居る。声にできないもどかしさを感じながらも、今、貴志と一緒にいる、それだけで、まきは最高に幸せだった。いつか眠りについていた。ふっと気が付くと貴志がベッドの横でコートを着ていた。

「もうじき始発の電車が来るから行くよ。」

「門まで送るよ」

「いいよ、寒いよ。雪みたい」

半纏を着て裏口から外に出た。庭木にうっすらと雪が積もっていた。貴志がまきを抱き寄せてキスをした。門の前から電車どおりに向かって白い道が延びていた。薄暗い朝の冷気がまきの全身にやっと伝わった。いつもの笑顔でゆっくりと片手を挙げて彼は背中を見せた。

「滑らないように気を付けてね」

貴志の黒いコートが点になるまで見送った。

後日貴志が語った。

「あの夜ほど朝の来るのが遅いと感じたことは今までにもなかったしあれほど長い夜はこれからもないと思うよ。まきを抱いているのに何も出来ないし…」

あれから何回目の冬なのだろう。携帯電話が普及した現在、あの夜のような経験はもうすることがない。今のまきのように貴志はあの夜を思い出す時があるのだろうか。まきは目を伏せた。後悔はしたくない。貴志との別れは正しかったと思いたい。そう思いながらまきの体から貴志が消える日は一日もなかった。まきの全身のどこかに必ず彼は存在していた。

翌年の三月まきは短大の卒業式に参列した。卒業式の前に彼女はすでに寮を出て香川の高松から新幹線で神戸に来て短大近くのホテルに泊まっていた。制服で卒業式を済ませその後美容院に行き振袖姿で謝恩会に臨んで貴志と一緒にホテルに帰った。ホテルのロビーに由香里と青木が待っていた。由香里は薬学部でまもなく三回生だ。貴志が

「こんな所へどうしたんだろう?」

つぶやくのと青木の

「中村にちょっと説得して欲しくて…」が同時だった。

ホテルの喫茶店で四人は座った。

向かいの席の由香里と青木が激しく言い争っていた。

困惑のお互いの顔を見合わせながら貴志とまきは黙って二人を見ていた。

「ニューヨークに私も行きたい。私は一人で語学学校を見つけて寮に入るから迷惑は掛けない。佑一のそばでいたい。大学は休学して又薬学に戻るから」

由香里は何回も繰り返していた。青木は一人で行くとやはり繰り返していた。青木建設の社長の息子の青木佑一は帝王学を学ぶためニューヨークの大学の編入試験に合格していた。それは去年から決まっていたので由香里はずっと一緒に行きたいと訴えていた。だが青木は一人で行きたいと譲らなかった。まきも貴志も青木の心に由香里がいないことを察した。二人ともその事を分かりすぎるほど感じた。でも由香里にはそれが通じない。いや、十分に解っているのかも知れない。きっとそれでも納得できないのが由香里の本音。それゆえ由香里を説得するすべもなく、繰り返される二人の様子を黙って見つめていた。まきは新幹線に乗り、香川の高松に今晩中には帰らなければならない。結局洋服に着替える時間もなく振袖のまま新神戸駅から新幹線に乗って帰った。ホテルに青木と由香里を残したまま、新神戸駅まで貴志が送ってくれた。

「まきの振袖を脱がしたかったな」

貴志は笑った。

「このスケベー」

まきも笑いながらも由香里の心情を思った。が、将来貴志に別れを告げられることは絶対にないと確信していた。貴志の態度や言葉にはまきを大切にしている様子をいつも確信していた。どんな時にも変わらなかった。ただ眼前の別れが辛くて涙ぐんだ。直ぐ会えるのにと貴志はまきの頭をなでた。新幹線に乗ろうとするまきを、貴志が横から抱きしめた。帯が一瞬ゆるみ、体が収縮し固まった気がした。その感触のまま列車に乗って振り返るとそこには貴志の笑顔があった。手をふろうとしたら、新幹線はあっという間に発車した。

その後、貴志はホテルに帰り青木と由香里と三人で長時間話し合ったが結局話はまとまらずに強引に青木一人ニューヨークに行くことになった。由香里は結局大学をやめて静岡の実家に帰ったと貴志から聞いた。まきには一言の連絡もなかった。

「なんで?」

「何もかも忘れて違う人生を歩きたいから…まきによろしくと言っていた」

まきは寂しくて納得できなかったが、携帯も持たない時でそのままになった。由香里の実家は静岡で薬局を営み父が薬剤師で、由香里は一人娘で薬剤師を目指して薬学部に通っていた。運良くここに合格したので静岡を離れて神戸に来たのだと語っ

ていた。その大学を辞めて実家に帰りどうするのだろう。まきの心配に貴志が答えた。静岡の大学に薬学部があるので、又落ち着いたら勉強して編入試験を受けるつもりと静かに笑っていたよと。

まきの卒業から少し経った頃、神戸へ出かけてニューヨークへたつ前の青木佑一に貴志と夕食をご馳走になったことがある。

前の夜、高松港からフェリーに乗って朝早く「おおぎ」と言う神戸の港に着いた。貴志が車で迎えに来ていた。青木と約束していた時間まで貴志と二人で過ごした。愛された後のけだるい体の余韻を残したまま約束のレストランに到着した。青木の隣にいる女性を紹介された。

「こちら、水田直子さん」

まきははっとして身構えた。後で貴志が京都の老舗の料亭みずたの娘だと教えてくれた。青木と一緒にニューヨークへ行き語学学校に通うと話した。

「由香里はほんとにしっかりして何もかも理解しすぎる、すべてに。窮屈なんだ。その点直子はのんびりしすぎでいらいらすることも多いけど心が休まる。その点まきちゃんはほんとに良い。僕はまきちゃんが理想だ。」

直子が席を外した時に青木は言った。

まきは僕のものと貴志は笑った。まきを理想と言いながらきっと又変わるとまきはその時の青木に好感は持てなかった。その後直子にもそして青木にも会うこともなく何年になるだろうか。

まきはこの香川の高松に帰って就職した。希望していた銀行、証券会社に入れず大手企業の関連会社である今の会社に二回生の秋の終わりにやっと内定をもらった。まきが自宅通勤とはいえ、慣れない会社勤めに心身とも精一杯の日々を過ごし始めた時に貴志はＳ大の四回生になった。夏前に公務員試験の一次試験に合格して余裕の大学生活を送っていた。家庭教師のアルバイト以外に制約のなくなった日々、一方、まきは今までワープロ以外扱った事のなかったのにパソコンのキャドとかいちたろうのソフト等の研修に追われていた。やはり香川の地元銀行に就職した岡田友子は休日には自由時間を謳歌していたが、まきはパソコンの本を数冊読まなければ翌週の研修が理解できなかった。週末に貴志から会いたいと電話が入るのがいつか苦になっていった。

「いつも忙しいばっかりだ。」
穏やかな中村貴志が電話の向こうで声をあらげた。まきは黙った。明日の日曜を控えて土曜の夜、仕事の本を読んでいた。窓越しに秋の月が見えた。どこにも行かなくてもまきの顔が見たい、会いたい。毎週繰り返す貴志の言葉が憂鬱の原因にさえなっていた。
「今日はあす係長が東京のプレゼンに持っていく資料作りに追われたので自分の仕事がほとんど出来なかったの。あすはほんとに駄目よ。どうしても月曜日までにしなきゃいけない仕事が」
「ごめん。君の立場を考えなかった…」
静かに受話器を置く貴志の顔が浮かんだ。涙が流れた。
もうおしまいかも知れないと唇をかんだ。なんで銀行に就職できなかったのかと思ったりしたが、まきは現在の仕事が好きだった。むずかしいと思ったコンピューターも触っているうちに少しずつ動かせるようになった。毎日できることも増えると面白い事もある。でも貴志との関係はどうなるのだろう。文部科学省を希望している貴志は来年東京だ。今より会えなくなる。今のまきには彼とのことより仕事の方が気になった。なるべく考えまいと明日の仕事に必要な資料を読むうちに貴史の事は忘れていた。翌日の日曜日の昼前、会社のワープロで資料を作っていたまきのそばの電話が鳴った。
「まきちゃん、今空港にいるんだけど僕の机の上にひょっとして資料置いてないかな?忘れたみたいだ。家内に取りに行かせば良いのだが、実家の店番に父が体調悪いので…」
係長の実家は電気店だ。係長の机の上に封筒がある。
「いいですよ。空港ですね。今から持って行きます」
空港に着いて駐車場に車を入れて空港内の道路を搭乗口にいる係長に手を振りながら渡ろうとした時
「まき」
貴志が到着口から見えた。係長もその声の方に顔を向けた。その係長に封筒を渡しながら
「気をつけて行って下さいね。友達が…偶然」
「彼だよね。仕事はいいから今日は彼との時間を大切に」

係長が去ってからまきと貴志は向かい合った。まきのとまどいの表情を貴志は見逃さなかった。とにかくいったん会社に戻ってからとまきの車に乗った。
「係長が持っていく資料を会社に忘れて仕事の途中に持って来たの。偶然ね。でも会えて良かった」
貴史は黙っていた。会社の駐車場に着くとまきを横から抱きしめた。
「誰か来るかも…机の上だけ整理して戻るからここで待っていてね」
「家庭教師のバイトの日なので夕方には帰らなければいけない。高松駅まで車で送って欲しい」
「そう…時間ないからどこにも行けないね。近くの喫茶店でお昼食べるくらい」
会社の机の上を整理しながら明日打ち合わせの資料をワープロで打ちたいと思った。貴志がほんの数時間の空きを見つけて来てくれた喜びよりもその気持ちが優先した。それがなぜか悲しくて貴志と喫茶店で向き合うと顔がゆがんだ。
「ごめんなさい」
「すっかり困らせているようだね」
その言葉に涙が出た。否定できなかった。何か言って貴志を安心させたいと思うのにそれが出来ずに時間は過ぎた。十一月の日暮れは早かった。四時過ぎなのに薄暗かった。貴史を助手席にまきは高松駅へ車を走らせた。
「マリンライナーの時間にはまだ大丈夫なの」
「ああ」
駅近くの路地にある、日曜日で休日の食堂の前に車を止めた。キスをした。貴志はまきを抱いて離さなかった。やがて静かにドアを開けて車から降りて背を向けた。その背中に暗闇が迫っていた。
「貴志ごめんね」
頭を振りながら貴志が振り向いた。ハンドルにすべらせていた手を振ろうとしてハンドルに思いっきり手をぶつけた。貴志の笑顔と手が薄明かりの中で見えた。フロントガラス越しに思いっきり手を振ってその手で涙をぬぐった。貴志の姿が見えなくなるとほっとした。その感情に自分自身驚いた。これからゆっくりパソコンに向える、仕事に専念できる、心の底からそう思った。
その時の感情がまきの運命を大きく変えた。

十一月も終わりの勤労感謝の日、朝、まきは美容院へ行く前に貴志の家に電話をした。母親が貴志はいないと答えた。偶然、美容院の帰りに岡田友子にあった。近くの喫茶店で昼食を食べながら話した。彼女はこちらで銀行に就職している。大阪にいる彼がこの頃様子がおかしくて、休日は高松にいることが多いと、かわいい顔を曇らせた。短大を卒業以来数回会ったがお互いの生活が忙しく、近況報告を時々電話でする程度になっていた。彼女は夕方、銀行の友達との約束があるとのことで明るいうちに別れた。帰ると、母が貴志から電話があったと伝えた。あわてて電話をすると再び母親が出て貴志はいないと、そしてまきの問いにいつ帰るか分からないとそっけなく答えた。その後、まきは出かけずに彼からの電話を待ったが貴志からの電話はなかった。その日は終わった。

日暮れの早い秋の毎日はあっけなく仕事に明け暮れた。

十二月になって、会社の勤務時間後突然の高熱に襲われた。同僚の車で自宅近くの病院に行きそのまま入院した。翌朝、前夜の熱と体の苦しみが嘘のように元気になった。

「まるで鬼のかく乱ね。」

母がほっとした口調で笑いながらまきに言った。原因もわからないままその日に退院した。その後、初めてのボーナスを貰ったまきは貴志との何かに使いたいと封筒に五万円をしまった。あれから何度か貴志に電話をしたが彼は出なかったし、掛けてもこなかった。貴志と別れたときの感情が後ろめたいものに変わり、貴志を責める気持ちは湧かなかった。年末が近づき落ち着かない日々を過ごすまきは美容院で円形脱毛を指摘された。微妙な心の動きは体に鮮明に現れた。貴志を駅で見送った時の感情がまきを苦しめた。

「昨秋にはありがとう。仕事が大変でぐらぐらしていた私ですがやはり貴志が一番です。」

精一杯の心を年賀状に書いた。来年の正月には神戸へ行こう、貴志に詫びよう、いっぱい愛されたい、感情は貴志を求めてやまなかった。年末、会社が休みになってからまきは貴志宛に手紙を書き始めた。内容は貴志への気持ちと現在の仕事の内容などだったが、どのように書いてもまきの現在の心情を表現できなかった。正月には

会える。その時に直接伝えよう。手紙は出さなかった。

平成四年は明けた。

貴志からの年賀状はなかった。信じられなかった。そんな時、岡田友子から電話があった。

「まき…今いいかな」彼女の声は泣き出しそうだった。元旦といってもまきの両親は居間でテレビを見ている。高校生の弟は友達と初詣だと夜中に出かけた。まきは自分宛の年賀状を自室で見ていたところだ。

「友子、うちへ来る？元旦だから喫茶店もほとんどあいてないし…

友子の家まで車で迎えに行くよ。」

友子の家は、まきの家から車で二十分位の高台にある。両親と兄夫婦が同居していた。母は正月だから何か用意をと言ったが、友子を迎えに行くついでにコンビニで食べるものを用意してまきの部屋の机に並べた。それから二人の話しが続いた。

友子は高校時代に知り合った兄の大学の後輩と交際していた。大学が大阪なので、短大時代は毎週のようにデートを重ねていた。まもなく彼は大阪で就職した。友子は大阪での就職も考えていたが、彼が経済的にもすぐには結婚できないと言うことでとりあえず、香川の高松に帰り銀行に就職した。銀行の休日の行事よりもできる限り彼との時間を大切にしてきたと彼女は語った。

そう言いながらも唇をかみしめる彼女の奥底に彼より銀行の行事を優先したことがあるのではないかとの後悔が垣間見えた。まきだからこそ分かる後悔がひたひたと押し寄せてきている。まきも同じだ。

「この四日の土曜日に道後温泉に行く予定をたてて旅館も予約していたの。行けなくなったから誰かと行って欲しいと言うのよ。それも年賀状に書いてあるのよ。おかしいでしょう。年末に分かっているならもっと早く電話で知らせてくるべきよね。意味分からないから電話をしたのに出ないの。留守電なのよ。」

まきも言葉につまった。彼が予約をしてその時に宿泊代は支払済みだと友子は聞いていた。涙を手で拭きながら一緒に道後温泉へ行って欲しいと友子は言う。彼の罪滅ぼしだとも言う。予約の時から一緒に行く気持ちは無かったのよ。それはないと思うよ。とまきは打ち消した。

「正月三箇日は当然だとしても松の内の道後温泉は盛況で予約は難しいよ。それをわざわざ予約してそれに銀行は通常なら四日からお仕事でしょう。今年がたまたま土曜になるのを知ってちゃんと予約してくれたのよ。」
まきの会社も通常は五日から仕事だが今年は五日が日曜日になっている。
「どうでも良いわ。行きましょう。行きましょう。」
涙でくしゃくしゃの友子が大声を出した。
「あっ中村さんが四日に来るっていうことはないの」
まきは顔を曇らせた。年賀状もくれない貴志が高松へ来るはずがない。でも一方ひょっとして今にも電話はないかと電話のベルを待つ自分が惨めだった。
「私も同じよ。」友子に貴志が突然高松へ来た時のことを簡単に話した。年賀状も着かないし、嫌われたのと言いながら、心の中で貴志からの連絡を待ちわびていた。友子と道後温泉へ行く約束をしてからも変わらず待った。まきから貴志に連絡する勇気はなかった。あの時まきが必死に貴志に連絡をとり、貴志に会いに行ったら事態は変わっていただろうか。まきは何回それを考えたろう。何回後悔の涙を流したろう。どうしても消せない黒一点はまきの体から消える事はなかった。
車で松山まで行くのは母に反対されて友子と二人はＪＲで松山駅まで行き電車で道後温泉の旅館に四日の午後到着した。道後温泉の本館には行かずに旅館の温泉に入り友子と二人飲み語り翌朝ふっと目が覚めた。友子はぐっすり眠っている。そっと布団から出てはんてんを着て部屋を出た。六時前だ。まもなく日の出だ。露天風呂が二十四時間沸いていると聞いていた。足元が冷える。露天風呂の戸を開けると竹囲いの下にうっすらと雪が積もっている。今年は暖かいと思っていたがさすが高台にある旅館だ。露天風呂は竹囲いを境にした殺風景な造りで誰もいなくて物音ひとつしない。浴槽に体を沈めた。少しすると竹囲いの下の雪の上に黒い鳥がすうっと現れた。それは浴槽の上に移動して、まきの頭上を回り始めた。
「何の鳥かしら…」ゆっくりと音もなく回る。ずいぶんしてから又雪の上に音もなく移動する。
「貴志…」
つぶやいて思い出して涙が頬をつたう。さよならを言いに来た。貴志が鳥になってお別れを言いに来た。いつまでも貴志の心変わりを認める事ができないのでそれを教えるためにこうして現れた。鳥は再び雪の上に止まった。じっとまきの方を見て

いる。涙でにじんだ鳥の姿を何分も見ていた。すると再度まきの頭上にやって来た。そして静かに旋回する。やがてゆっくりとまきのそばから去っていこうとした。手を伸ばすと届きそうな気がする。手を差し伸べるとそこからすべるように去っていった。どうにもならないもどかしさがまきを苦しめた。

あの寮から見送った貴志が黒い点になったように、その鳥も点になって見えなくなった。見送るまきの心にはなんの変化もなかったが貴志の心は確かに変わった。

平成四年一月

「貴志の事はもう忘れよう。貴志は私を嫌いになった。」

まきは心に決めた。

それ以来貴志に連絡をしなかった。貴志からもなにもなかった。

喫茶店でうっすらと積もった雪を窓越しに眺めてまきは我に返った。あれから色々なことがあった。まきは結婚を考える相手も見つからないまま、弟の結婚をきっかけに実家を出て会社の近くのマンションを買った。が、弟夫婦も両親とうまくいかず実家は父と母が二人で住んでいる。銀行を退職して系列の会社に数年勤めた父は退職後、家でぼんやりしている事が多い。その事を嘆いたり、弟に経済援助をしている事を愚痴ったり、母も年相応の悩みをまきに言う事が多い。しかしその母は今までまきに貴志のことも結婚のことも聞いたことがない。

何もかも察知して聞かない母のやさしさをまきは感じている。道後へ一緒に行ってから友子とは何でも相談できる親友になった。その友子が五年前に結婚をした。友子の支店に配属された新入行員で七才年下の彼と恋におちた。周囲に反対されて特に彼の両親は最後まで認めてくれなかった。両親が年を重ねて生まれた一人息子ということもあり、説得はできなかった。勤務時間内も外も大して目立たず、容姿もごく普通の彼のどこに惹かれたのかまきは聞いた事がある。

「私に対して真剣に対応してくれるの。私に一生懸命なのよ。そんな彼が好きなの。」

友達や職場の人達だけの結婚パーティを経て二人は新婚生活を始めた。そして五年、友子は二人の子供の母親になっている。子供が欲しくて病院通いでやっと三年後生

まれたのが女児の双子。一年の育児休暇をとるのがほとんどの中、高齢の夫の両親の経済的な理由もあって、産前産後の休暇以外はずうっと勤めている。忙しい友子と会うのはもっぱら週末、友子の銀行の社宅のマンションにまきが行く事が多い。とりとめのない話を友子とするのが二人とも息抜きになっている。先日友子が銀行で見付けた大手自動車メーカーの
業界誌をまきに見せた。
「わが社のトップセールスマン」との見出しにあの「吉岡卓也」が載っていた。
「友子、よく見付けたね。」
「そうでしょう。奥さん真紀って言うんだよ。高校時代の初恋の人と同じ名前の真紀夫人と二人の男の子って写真に添え書きあるでしょう。まきのこと初恋の人だって、吉岡君」
頷きながらあのぶっきらぼうな卓也が営業のトップになっている事に驚いた。長い年月は人を変える。

まきの中にはいつも心のどこかに貴志がいるが、貴志の中にはまきは存在しないのか。十数年は貴志をどのように変えているのか。二十歳だったまきもまもなく三十半ばだ。
こうした雪の朝は格別貴志を強く思い出す。黒い点になった貴志がこちらに向って来てくれないか。
窓越しに通勤や通学の人の往来が増えてきた。めったに降らない雪と寒さにとまどっている様子が垣間見えた。風花が舞っていた。
まきのいる喫茶店にホテル客と思われる人の出入りが激しくなった。まきは外の寒さを想像しながらも思いきって立ち上がった。
一人の男性がまきを見ている。その風貌に心当たりはないように思えた。
「まきちゃん、ひょっとしてまきちゃん」
大柄なコート姿のその男性が立っていた。
「青木さん」
まきの声が震えた。あの強引な自信に満ちた彼を年月は穏やかな男性に変えていた。青木建設はバブル崩壊の時に国の再生機構の傘下に入り事実上倒産していた。その

ニュースをまきは他人事とは思えず心を痛めた。その青木佑一が慈愛に満ちた目でまきを見ている。
苦労や悲しみは人をこんなにも変えるのだろうか。
「まきちゃん…四国の高松だったんだ」
「青木さん、ほんとにお変わりになられたわ。素敵になってる。」
まきは思わずつぶやくように言った。
「いろいろあったから」
苦笑いをしながら青木は言った。
「今度高松にみずたを出店さすので」
みずたは直子の実家だ。今は女房の実家の役員でこの度の高松出店で昨夜から打ち合わせに来ている。彼は説明した。高松の中心の商店街は再開発が成功して全国的に注目されている。このホテルも再開発の中心部分になっている。みずたの出店もその流れの一環なのだろう。「直子さんと結婚されたの。」
何も言えなくてそんなことを聞いた。
「何年ぶりかな。そうだ…中村の十三回忌が去年だったから十四年になるかな」
一番聞きたかった貴志の事だ。絶句した。
「えっ今なんて言ったの。貴志がなんて」
声が震えてかすれた。体の中を太いパイプが貫いた。
「えっまきちゃん、知らなかったのか。中村のお袋さん
知らせなかった…そうだったのか。僕もニューヨークだったし」
何か言おうとしても唇がわなわなとして言葉にならなかった。沈黙が流れた。
しばらくして青木が口を開いた。
「確かあれはぼくがニューヨークにいる時だから…平成四年の十二月中旬だったと思う…」
　まきは青木の言葉を遠い関係のないところから聞こえてくるような気がしていた。返事をしようにも体の中に押し寄せるものが突き抜けてはまた戻ってきて声も出なかった。
「ニューヨークにいる時中村からよく電話がかかったよ。まきちゃんに会いに行っていやがられたとか仕事でいっぱいで余裕がないみたいだとか…」
まきのあの時の状態を貴志は分かっていたのだろうか。その通りだ。余裕がなかっ

た。まきの目から涙がとめどなく流れた。
「交通事故だ。車にぶっつけられて」
「まきちゃんの短大の近くの大きな交差点。家庭教師の仕事で生徒の家までは行ったらしいが、生徒が急に体調を悪くしたので帰ったとのことだ。お袋さんなんかはなんであんな所へ行ったのだろうと不思議そうだった。ぼくはお葬式には出られず、正月に日本に帰ってからだけどお袋さんと話しをした。」
友子と道後温泉に行った正月のことだとまきは気づいた。
そしてあの交差点だ。パトカーに止められた交差点。ショパンの曲が流れていた喫茶店に貴志は行くつもりだったのか。あの喫茶店は今でもあるだろうか。そんな事が心に浮かんだ。
「時間だ。」
青木はまきを困惑してながめながら、あせった声を出した。ポケットから名刺を取り出して何か書きながら
「これがぼくの携帯電話の番号」
「今日はもう京都に帰るけど、又こちらには来るからいつでも連絡して。まきちゃん大丈夫かな。」
「…ありがとう」
やっとのことでそういうとまきはふたたび座った。青木は出口の方へ向いつつ何度も振り返った。体中をあちこち動き回る棒状のものがようやく落ち着いた時、周りの様子が目に入るようになった。ショルダーバッグをかき回して携帯電話を取り出した。
「まき、めずらしいね。朝、電話してくるなんて」
「おかあさん、今から行くから…仕事で徹夜して帰って寝ようと思っていたけど」
嗚咽になった。母は何も言わなかった。
「貴志、亡くなっていた。私が会社に入った年の十二月に。去年が十三回忌だったなんて」
「十二月十三日に亡くなったのではないかしら。きっとそうよ。まきが突然熱を出した日よ。おかあさん鮮明に覚えているわ」
それで気が付いた。そんなことがあった。あの日のまきの体の異常は貴志の死のせいなのか。それから母はまきの弟のことを言った。

「おかあさんも大学生の哲也が突然死んだら彼女には知らせたくないと思うよ。それに中村さんのお母さんはお父さんも亡くしていらしたし…ほんとにお気の毒」
貴志の死は彼の父が死んでから数年しか経っていない事にはっとした。
「なんで、なんで」心の中で繰り返した。貴志にはもう会えない。会える日を何回想像しただろう。東京出張の日に、文部科学省付近を意味もなく歩いた。神戸へ行った時、彼が母と住むマンションを見あげた事もあった。携帯の普及した今も自分で行動しなければ何も変わらない。まして十年以上も前だ。まきの思考はくるくる回った。
「まき、しっかりして」
「大丈夫よ。まきはまだ若い。ほんとにだいじょうぶよ」
「これから始められるよ。きっといっぱい新しい出会いがあるよ」
母の声は携帯から力強くたてつづけに聞こえてきた。

「負けない。だいじょうぶ」
心で叫びながら外へ飛び出した。ビルの谷間から陽に照らされたまきの会社が見えた。
「がんばろう」
積雪の道をまっすぐ顔を上げてせいいっぱい歩き始めた。

おわり